

はじめに

私が所属している東海学園大学の人文学部には、図書館司書の資格を取得するための司書課程があるので、多くの学生がそれをめざして入学してきます。また、全国の大学に設置されている司書課程で同じように資格を取ろうと入学してくる新生を合わせると、毎年およそ一万人になると言われています。

そこで、司書の資格を取りたいという学生と面談をするときには、よく次の質問をするようにしています。

——司書の方が図書館でどういう仕事をしているか、イメージができますか？

もちろん、この質問に正確に答えられる大学生はなかなかいません。司書として図書館で働いたことがないわけですから、当然といえば当然です。

けれども、大学の司書課程で使われている教科書や、図書館員の方に向けて書かれている本を読んでいるうち、学生がこの質問に答えられないことにはもう一つ別の理由があるのではないかと思うようになりました。

それは、これらの本に書かれている内容のほとんどが、非常に専門的なものだということです。

図書館情報学に基づく情報の集め方・処理のしかた・蓄積のしかた、図書館の運営や本についての知識、あるいは図書館サービスの考え方については、これらの教科書と授業とで十分に学ぶことができます。

一方で、司書の方が図書館でいつもどういう仕事をされているのか、どういう人が司書に向いているのか、司書になるためにはどういう勉強をすれば良いのか……など、とても基本的なことが書かれている本がほとんどないのです。

最近では、図書館を舞台にした小説やマンガが、数多く出版されています。しかしこれらの本でも、司書の方の具体的な仕事内容を描いたものはありません。

そこでこの本は、司書課程のある大学の受験を考えている高校生の皆さんや、新たに司書課程で勉強を始めようとしている皆さん、あるいは、図書館に就職しようとしている皆さんに向けて、司書の方がふだんされているお仕事の内容を、ストーリー形式でわかりやすく読めるように作ったものです。

小説の中には、図書館で使われている独特の用語も出てきます。それらには意味の注記や解説も書いてありますので、この本を読んだ上で専門的な教科書を読んで頂けると、より理解しやすいのではないかと思います。

一冊で司書のお仕事のすべてを書くことはできませんが、実際に司書として働いている方からお話を伺いながら、できるだけ多くの話題を入れるようにしました。今回、扱うこと

ができなかった話題については、万が一、二冊目が出せる状況になったら書きたいと思いますので、本書を読んで面白いと思つて下さった方がおられましたら、ぜひ広めて頂けましたら幸いです。

図書館司書は、地域や学校にいる人たちが学んだり、より正確な情報を探したりするために欠かせないものです。また、非常に奥が深い専門職で、働けば働くほど次々に新しいことに取り組んでいかなくてはいけない、とてもやりがいのある仕事だと思っています。

この本で司書という仕事に触れることで、ぜひ資格の取得と、図書館司書になることをめざして頂ければと思います。

最後に、この本の執筆にあたっては、監修と解説の執筆をお願いした犬山市立図書館の小曾川真貴さんのほか、小牧市立図書館、愛知県図書館、千代田区立千代田図書館、東海学園大学図書館をはじめ、多くの図書館と、図書館司書の方々からご協力を得ています。ここに厚く御礼申し上げます。

大橋 崇行

目次

はじめに……………大橋崇行

第1章 **NDC**分類の悪戯

コラム◎NDC分類

コラム◎図書館員と司書

コラム◎司書のお仕事

1

7

104

108

109

第2章 謎解きは選書の前に

コラム◎YA(ヤングアダルト)書籍

コラム◎図書館のイベント企画

第3章 初恋レファレンス

コラム◎レファレンス・サービス

コラム◎学校図書館と公共図書館

おわりに……………小曾川真貴

111

171

172

175

249

251

254

主要人物紹介



いなみふたば
稲嶺双葉

公務員試験で採用され、四月から味岡市立図書館で働きはじめた新人司書。一般書担当。高校生のときまでは部活一筋でほとんど本を読まない生徒だったが、自宅近くにある味岡市立図書館の分館で花崎智香と出会って彼女に憧れ、都内の女子大に進学して司書資格を取得した。

明るく元気で、ちよつとしたことではめげない性格。子どもの頃から探しものが得意。仕事に追われて、よく館内を走り回っている。



やましたあさみ
山下麻美

児童書担当。年齢は双葉より三つ上だが、司書としては一年先輩。口数が少なく、思ったことをそのまま言ってしまう性格に見えるが、実は単に人見知りで口べたなだけで根は優しい。

大学院まで英文文学を専攻しており、司書という仕事に強い使命感を持っている。レファレンス調査の能力は高く、その実力には館長や智香も太鼓判を捺している。

趣味は同人誌制作と、全国各地の図書館めぐり。

ほしのゆうき
星野裕樹

双葉とは保育園のときからの腐れ縁で高校まで一緒だった。今は味岡市立大学の大学院生で、麻美の後輩。

はなざきともか
花崎智香

双葉と麻美の上司で、図書館の主任司書。文芸書担当。気さくで可愛らしいお姉さん。

しもすわじゅんや
下諏訪淳也

味岡市立図書館館長。物腰がやわらかく、いつも飄々としている。

日本図書館協会の認定司書。

第1章 **NDC**分類の悪戯



就職してから初めて連休を取ることができたのは、七月半ばのことだった。

私が勤めている味岡市立図書館では、毎月、休日を入力したエクセルのデータを共有して、交替で休みを取るようになっていた。けれどもあまりにみんなが忙しく働いているので、たった二日の休みでさえ気が引けて、書き込むことができなかったのだ。

新幹線で東京に向かった私は、新宿にあるカフェで大学時代の同級生たちに会った。卒業式からまだ四カ月しか経っていない。それなのに新宿の人混みは、ずいぶん久しぶりのように思えた。

「そういえば双葉、図書館に就職したんだっけ？」

目の前に座った同級生は、学生時代からは想像がつかないほど派手なメイクをするようになっていた。化粧品メーカーに就職したせいだろうか。まるで別人みたいに見える。そのことに目を瞠っていた私は、急に問いかけを向けられて、「うん。大学で司書の資格を取っていたから、地元の公務員試験を受けたら、図書館の配属になったんだ」と、早口に返事をした。

「そうなんだ。良かったじゃない、楽そうなところに就職できて。図書館の司書って、カウンターに座って本の貸出をしたり、返却された本を棚に戻したりしていればいいんでしょ？」

彼女の言葉に、私は反論したい衝動に駆られた。

図書館の司書には、利用者には見えない館内で、山のように仕事がある。今日だって、主任司書の智香さんが気を遣ってくれたから、こうしてやつと東京に出てこられた。

けれども私は、そんな思いをグツと飲み込んで、

「まあでも、それなりに忙しくしてるかな」と、愛想笑いを浮かべた。

図書館司書の仕事を一言で説明するのは難しい。(↓コラム◎司書のお仕事、一〇九頁)

本を扱う専門の仕事以外にも、やるべきことがあまりにもたくさんある。

それを言葉で説明して、わかってもらう自信がなかったのかもしれない。

私は同級生たちの会話に混ざりながら、ずっとどこかモヤモヤとした気持ちでいた。その思いは結局、東京から地元の味岡市に戻ってからも、なかなか消えてくれなかった。

* * *

連休が終わって仕事に復帰をした、月曜日の午後。パソコンに向かって事務仕事をしていると、急に睡魔に襲われた。勝手に瞼が閉じてくる。目を開いているのもつらい。

そのとき不意に、「ずいぶんと暇そうね」と、頭の上から声が聞こえてきた。

私はハッとして、顔をあげた。腕組みをした麻美さんが、目を細めて見下ろすように冷たい視線をこちらに向けていた。

麻美さんはおそらく児童書のコーナーにいて、そのままここに来たのだろう。ひよこのプリントが施された黄色いエプロンを身につけている。私より一年先輩の彼女は、切れ長の目をして黒い髪を長く伸ばした、クールな美人だ。だから可愛らしいエプロンは、妙に違和感があるように見える。

「すみません！」

私はとつさに立ち上がり、深々と頭を下げた。

麻美さんはふうと大きく息を吐くと、「冗談よ。目が覚めたでしょう?」と言って、クスリと笑った。

麻美さんはいつも表情を変えることもなく、淡々と仕事をこなしている。けれどもときどきこうして、悪戯っぽい態度を見せる。

「ちょっと、ついてきてくれない? 館長と智香さんが呼んでいるから」

麻美さんはそのままの様子で言う、返事も聞かないままくると体を反転させた。

私は慌てて椅子から立ち上がり、あとを追った。

味岡市立図書館の場合、館長とはといっても、館長室などという立派なものがあっていつもそこでふんぞり返っているわけではない。三階にある事務室に入ってすぐのところに、私たちが使っている事務用の机よりもひと回り大きな木製の机が置かれている。これが館長のデスクだ。

考えてみると、いちばん偉いはずの人の机がこんなところにあるというのも、奇妙な感じがする。しかも気が付くと、この机はいつのまにか、置き場がなくなった本たちの仮置き場になっている。

だから下諏訪館長は、ビジネスマン向けに解放している学習支援室にノートPCを持ち込んだり、なぜか閲覧室で仕事をしたりしている。

館内ではビジネスコーナー以外、パソコンの利用は禁止。そのため、変なおジサンがいるから注意してほしいと、利用者から苦情が出ることもある。

そういうとき、私たちは困ってしまう。さすがに、あれは館長なのだと説明することはできない。

この日、私が麻美さんに連れて行かれたのは、地下書庫の片隅にある小さな部屋だった。

館長は室内に設置された小さな机にノートパソコンを置いてパイプ椅子に座り、キーボードを打ち鳴らしていた。そのかわらには智香さんが立っていて、画面を覗き込んでいる。

「またこんなところで仕事してたんですか?」

倉庫に入るなり、麻美さんは「言ってくれば、私が机を片付けますから!」と、強い口調で言った。

けれども館長は、いつこうに気にする気配もなかった。

「僕はこういう、狭くて暗いところが大好きなんですよ」

朝起きたきり整えてもないようなボサボサの髪に、黒縁の眼鏡。よれよれのスーツ。顔立ちは案外整っているんだからちゃんと身繕いすればいいのにと、いつも思う。

柔らかな物腰に穏やかな口調で話すその様子は、もし知らない人が見たら、管理職にいる男性だとは思わないだろう。

「猫じゃないんですから。それに、ここの椅子は固いです。また、腰を悪くします」

麻美さんは肩を落として、大きく溜息を吐いた。

「そうかなあ。僕にはこれくらいがちょうどいいんだけど」

「ちゃんといえるべきところにいてください。緊急事態があったとき、探せないとい困ります」

「うーん。厳しいね、山下さんは」

困ったように頭を掻いている館長を見て、いたたまれなくなつたのだろうか。二人のやりとりをニコニコしながら聞いていた智香さんが、「まあまあ、せっかく双葉ちゃんも来たんですし、先にお仕事のことを済ませちゃいましょう」と、麻美さんをなだめた。

麻美さんは、まだほんの少し不満そうに口をへの字に曲げながらも、なにも言わずに黙り込んだ。智香さんから言われると、館内にいる誰もがこうなってしまう。

もちろん智香さんは、けっして自分の考えを押しつけるような人ではない。

いつもふわふわの可愛らしい服を着て、ニコニコと笑顔を浮かべている。少し童顔で、一重瞼の優しい顔つきをしているせいかな、味岡市立図書館では館長の次に重要な主任司書という立場に二十九歳という年齢にして異例のスピード昇進していることを、私たちは普段あまり意識しない。どちらかというと智香さんは、近所に住んでいる優しいお姉さんというような存在なのだ。

「じゃあ双葉ちゃんも、ちょっと奥のほうに来てくれる？」

智香さんと呼ばれた。私は左右に積まれた段ボールのあいだに作られたわずかな隙間を縫うように歩いて、部屋の奥へと進んだ。

館長が使っているノートパソコンの周りに、古い段ボール箱が八つ置かれている。そのうちの一つは箱が開いていた。

館長は、「とうとう、みつかつちゃったんだよね」と、苦笑した。

「みつかった、ですか？」

私は箱の中を覗き込みながら訊ねた。中には埃だらけの古い本や、塵と砂とで汚れた古い茶封筒が、ぎっしりと詰まっている。

「うん、いつか僕が整理しようと思っていたんだけど」

館長の言葉を遮るように、「五年も黙って隠していただなんて。館長は明日から一週間、おやつ抜きですね」と、智香さんが弾むような声を出した。ふだんと変わらない笑顔に見えるのだけれど、どこかちょっと怖い。

「なんなんですか、この本？」

私の問いかけに答えたのは、智香さんだった。

「五年前に味岡市立大学が新図書館を建設したときに、旧図書館にあった本をけっこうこつちに持ってきたのよ。ほとんどは私たちが整理して**配架**（本を書架に並べること）。「**排**」は「一定の順番に並べること、**排列**すること」、「**配**」はただ「並べること」なので、図書館の用語としては「**配架**」ではなく「**排架**」と書くしたんだけど、ここにある箱だけどういうわけか、受贈リストから抜け落ちていたの。バーコードやラベルを貼った形跡もないし、大学の蔵書印も捺してないから。たぶん大学のほうでも受け入れたきり、整理しないで放っておいたものなんでしょうね」

智香さんは説明しながら、箱の中に入っていた本を一冊取り出した。

だいぶ古い本だ。背表紙のところが壊れて、今にも本としての形が崩壊しそうになっている。

「これ、整理する前に燻蒸（くんじょう）しないといけないわね」

智香さんが呟いた。

「……クンジョウ、ですか？」

私は訊ねた。クンジョウという言葉を、頭の中で漢字に変換することができなかった。

智香さんはにつこりと微笑み、「和本も少し混ざっているみたいだから。こういう古い本には虫さんが住んでいて、卵を産んでいるのよ。紙魚^{しめ}つていうんだけど、放っておくと紙を美味しく食べられちゃうから、葉の入った煙でいぶして殺しておくの。防カビ効果もあるのよ」と、なぜか嬉しそうに言った。

「虫さんですか？」

「ええ。うねうねしてて、ちょっと可愛いんだけど……」

智香さんの言葉に、麻美さんがすかさず、「すみません。可愛いっていうのは、さすがにないと思います」と、声を出した。

「探してみる？ たぶん、紙の奥のほうに一匹くらい……卵ならあるかなあ」

「ダメですよ、こんなところで！」

声を荒らげる麻美さんに、「えーっ、双葉ちゃんにも見せてあげようと思ったのに」と、智香さんはひどく残念そうに肩を落とした。

どんな虫なのか、とても気になる。けれども、麻美さんがあれほど慌てるというのは珍しい。きつとかなりキモチワルイものなんだろう。私は見たいという気持ちと堪えて、「それで、こ

の箱に入っている本、どうするんですか？」と、訊ねた。

すると智香さんは、館長と顔を見合わせた。

やがて館長がコクリと首を縦に振ると、智香さんは、「この本を、麻美ちゃんと双葉ちゃんの二人で整理して、目録を作ってほしいの」と、にこやかに言い放った。

* * *

司書の一日は長い。

味岡市立図書館の開館時間は九時。早番のときは八時前には出勤することになる。

私は図書館からバスと電車とを乗り継いで、四〇分ほどの場所に住んでいる。朝ごはんを食べるためには六時前に起きてシャワーを浴びてメイクをし、七時前には出掛けなければならない。

開館前には、必ず終わらせなくてはいけない仕事がある。

一つは、新聞の受け入れだ。

朝、図書館のポストには、館で所蔵しているすべての種類の新聞が、文字通り山のように積まれている。

味岡市立図書館では、これらを新聞用の閲覧台に挟んで固定し、入れ替わりに前日の新聞をフアイリングすることになっている。このときすべての新聞に目を通し、特に郷土関係の重要なニュースについてはコピーを作って館内に掲示をする。公共図書館は、地域についての情報を地元住民に伝え、市民の知る権利を保障する場所としての役割を担っているのだ。

午後には図書の受け入れの他、次々と押し寄せてくる会議や作業が待っている。だから、特にインターネット経由で新規登録者の申請をしてきた利用者の登録と利用カード作り、遠隔地からの申し込みのあった資料の複写、他館との資料のやりとり、大学図書館や専門図書館の利用を希望する利用者の紹介状作成などは、早番で出勤した司書が午前中のうちに必ず終わらせる必要がある。

それが終わったら貸出や本の出納（利用者には開放されていない書庫（閉架書庫）から請求のあった本を取り出したり、本をそこに戻したりする業務）、カウンター業務を派遣の司書さんたちに任せて、私は館内の事務室で仕事することになる。

八時四十五分。図書館運営会社から派遣されている司書さんたちが出勤してくる。味岡市立図書館には、智香さん、麻美さん、私と、専任の司書が三人しかいない。だから、一部の仕事を図書館運営会社に業務委託している。こうした司書さんたちの出勤管理とミーティングの進行は、私の仕事のひとつだ。

他の図書館では、この時間に館内の掃除をしているところもあるらしい。うちの場合は、午後九時の閉館のあとに清掃業者が入っている。そのぶん、遅番は午後十時まで鍵を閉めるのを待たなくてはいけないけれど、朝は少しだけ余裕がある。

ここまでの仕事は、時間との戦い。

やっている。けれどもどうしても漏れが出てしまうので、早番の司書がもう一度確認をすることになっている。

閉館時間は午後九時なので、利用者がそれ以降の時間に本の返却をするときは、建物の外から返却できるポストに投函をする。味岡市は都市部の周りにあるベッドタウンだ。通勤帰りの人がこのポストを利用する頻度が高いので、この冊数がとても多くなる。返却処理と平行して、書架のチェック。ときどき、利用者が適当な棚に本を差し込んでしまうために、行方不明になる本が出てくるのだ。このチェックは前日の遅番に当たった司書が退勤前にも

もう一つは、返却ポストの確認。



新聞は毎日新しいものを新聞ホルダーで留め、翌日にはその月のものをまとめてファイリングする。
（撮影協力：上段・中段は愛知県図書館、下段は犬山市立図書館）